

2011年5月8日(日) 被災地障がい者支援センター視察の報告(高木誠一)

被災地障がい者支援センターみやぎで、ゆめ風基金の八幡理事からレクチャーを受ける。



・JDF東日本(東北関東)大震災被災障害者総合支援本部が仙台に設置されたが、現実の困っている障害者を支援する実行部隊が必要で「被災地障がい者支援センター」が被災3県に設置され、本部と連携して活動している。

・連休中は15名のスタッフがいたが、現在は4名なので静岡の応援はありがたい。宮城県は北部、南部に拠点を持ち、福島北部も支援できる体制ができてきたが、岩手は手つかずの状態。安否の確認はしたが障害者がどうなっているのかはまだつかめていない。

・被災した人は被災していない市町に避難している。被災者の情報がない。今ローラー作戦をしているところ。静岡から継続して支援してもらえらるなら、静岡県は岩手県を応援していることもあり、岩手は立ち上がったばかりなので継続して支援をいただきたい。(派遣スタッフはその日に盛岡行)

・宮城は浅野さんで変わったが、岩手は地域福祉がない。大きな法人が一手にまとめていてGHも施設と一体的だ。社会福祉法人への支援は福祉協会がうまくやっているので我々はそこは対象にしない。

在宅者や避難所の障害者への支援を行う。作業所や在宅で生活している障害者の情報がない。いま、それを集めているところだが、盛岡から3時間かけて避難所に向いているので時間がかかりすぎている。被災地の近くに拠点を設けることが急務である。

・福島は苦しいが避難指示が出ている施設は国の命令であるので、国が責任をもって人員を配置することになるが、10人に一人の職員



員の計画ではとても無理だろう。ボランティアも福島には来ない。

・阪神大震災は都市部での災害で近隣の都市からボランティアが通ってくれた。東北ではそれができない。これが阪神大震災と全く違うことになっている。

・行政は障害者を知らない。避難所には障害者はいないという。知的障害者や精神障害者は把握されていない。家族も避難所にはいられず、新しく住宅を借りたり親戚を頼って避難所を出ている。離れた人の情報はつかめない。つなぐために、避難所回りを早急にすべきだが人がいない。国はそのことを理解していない。



・岩手は居宅サービス基盤がない。入所施設があればいいということでやってきた地域だ。GH も入所施設の系列で増えている。サービスがないからニーズも上がらない。仙台と全く違う。将来的には、潜在的ニーズを掘り起こすことが問われる。そのことに地元の人が気づくことが必要で、その基盤づくりを今やるべきだ。

・入所施設も疲弊してきた。GH や作業所をつくろうという動きもあるが、サービス管理責任者がいない。責任者がいない。人材養成も長期には必要。

・作業所の支援では仕事がなくなったことが問題。沿岸部は海産物加工が主な仕事だが、その仕事がない。漁業が復興すれば全国で製品を販売して仕事を作るような支援が必要だ。

感想

- ・大阪の人と東北の人の気質の違い。
- ・地域住民のエンパワメント支援が必要。最後はソーシャルワークの役割だろう。
- ・都市部と地方のサービス基盤とニーズの違い。
- ・地域に包括されていない障害者の状態があぶり出されている。
- ・地域との共同の防災訓練や避難所運営の研究が必要。
- ・福祉施設は、訓練で救われた命が多い。作業所等は避難が早かった。地震の直後に移動したという。
- ・原発は人の壁も壊してしまう。原発の近くには支援も入れない。

吉岡からの報告 5/10

役所や避難所の聴き取り調査、要望のあったところへの個別支援を行っている。昼間に避難所に知的障がい者はいない。家を失った人は、避難所から特別支援学校や通所施設に通っている。特別支援学校で寝泊まりしている子どももいる。通所施設も失った人は、在宅で過ごしていたり、入所施設が受け入れているが、この先の地域福祉の再生をどうするのかは議論が必要。ホームヘルプサービスがないので、被災地支援センターがそれを担当している。在宅の人の、ホームヘルプサービスと日中活動の場の復旧が必要。精神障害者に相談できる人が必要。

盛岡からの活動は移動に時間がかかりすぎる。現在遠野に拠点を準備中だそうです。

現地の社会福祉協議会、福祉協会や育成会等の関係団体の連携はよくわからない。点で行われている支援を面にしていくには時間がかかりそう。

吉田からの報告 5/18

お疲れ様です。留守中ありがとうございます。こちらの活動の概要です。

メンバーは代表の今川さん、責任者の八幡さんの二人が設立以来います。あとのボランティアは増減があったようですが、大阪の複数施設が継続して派遣し、北海道からも先遣隊がきています。16日17日は総勢17人前後いて、来週からもしばらく10人近くは確保出来そうです。

センターの対象は「障害者」と「難病者」で、共に震災で生じた困難に対して支援します。障害者施設などはきょうされんなど他の団体が既に入っていると思われるので、センターはそれらにすくいとられない個人単位を調査・支援する方針です。

今までは役場から避難所へ情報をたどってきていましたが、避難所にいる障害者の絶対数があまり多

くなく、居てもあまり「困った」様子がなく、あまり支援に結びついていません。仮設住宅に移ったら、変わる可能性はあります。

現在のセンターの活動スタイルは、朝8時に2・3人チームで出発、沿岸部の被災地で個別支援と調査をし、夜7時に全チームが戻ってから報告・明日の予定等のミーティング。それから夕食・明日の準備・報告書作成などしたら1日終了です。ボランティアという特性上、全活動で報告書を起こし、誰もが引き継げるようにしています。

概要は以上です、不明な点はあると思いますが、追ってご報告します。

東日本大震災 災害ボランティア活動 **報告書** (5月16日～20日)

浜松協働学舎 青葉の家
生活支援員 吉田時成

私は静岡県作業所連合会・わより被災地障害者支援の募集を受け、五日間のボランティア活動を行ってきました。岩手県盛岡市にある「被災地障がい者センターいわて」（以下、センターいわて）の一員として、短期間ですが活動し、現地にて見聞したこと・感じたことなどを報告します。

■「センターいわて」の母体・・・阪神淡路大震災時から被災障がい者支援を行ってきた「ゆめ・風基金」と、現地の障がい当事者団体「たすけっと」で、被災された障がい者や難病者を直接支援しようと設立されたものです。社会福祉法人など規模のある施設は「きょうされん」などが調査で回っており、「センターいわて」はそれらでは救いとられない在宅や避難所生活をしている障がい者へ支援の手を伸ばしています。活動資金は、全国から寄せられた支援金です。

■「センターいわて」の概況・・・岩手県盛岡市街にあり、盛岡駅から徒歩15分程度の二階建ての建物に入っています。もともと電気店だった一階に事務所があり、パソコンなどの事務設備のほか、IHキッチンや全国からの支援物資もここに備蓄されています。二階はアパートになっており、二部屋を男女で分けボランティアの宿泊場所として使っています。

スタッフは、「たすけっと」からきている今川代表と「ゆめ・風基金」の八幡理事という二名の常駐スタッフと、全国（主に関西・静岡）からのボランティアで構成され、ボランティアは最多で19人、少ないと4人程度と増減が激しい状況です。

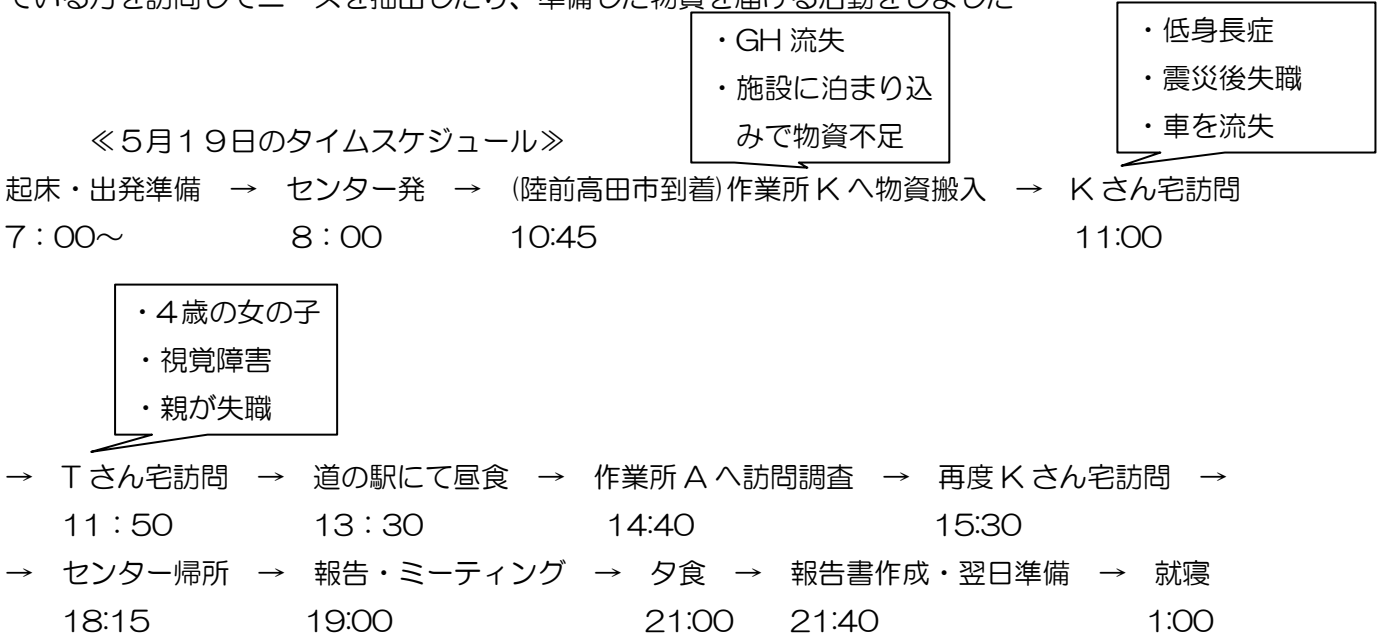
■「センターいわて」の活動・・・主に①調査活動 ②物資の支援 ③個別支援の三種類に分けられます。

①の調査活動では、まず市町村役場・社協などをまわり、もともとその地域に住んでいた障がい者の安否・所在や、福祉施設の現状を教えてください。その情報をもとに自宅や避難所を訪問し、障がい者本人やご家族などと面談して必要なニーズを引き出します。

引き出したニーズにより、②の物資の支援か③の個別支援か、あるいは両方必要か判断し介入していきます。物資に関しては、原則金銭では行っていませんが、食糧や衣類、必要であればパソコンなど高額なものも個人単位で援助しています。また通院時の送迎や入浴介助など、周囲の方や現地のサービスでは対応しきれないことは、「センターいわて」のボランティアが個別支援という形で援助しています。

これらすべての活動一つ一つについて、次のボランティアへ伝えるために報告書を作成していきます。

■具体的な活動内容…私は主に、沿岸南部の大船渡市や陸前高田市へ行き、事前に所在が明らかになっている方を訪問してニーズを抽出したり、準備した物資を届ける活動をしました



就労継続B型・就労移行支援の事業所Aは、施設自体は高台にあり津波による被害はなかったのですが、利用者の方たちの中には家を津波で流されたり、亡くなられた方もいました。職員も半数以上は自宅を失っていましたが、施設に避難・泊り込んでしのいでいる状態です。施設は通常運営され大多数の方たちは通所されていましたが、なかには慣れない避難所生活で混乱し、家族とも距離を置かざるをえない方もいました。

また通所できても、沿岸地域の作業所が多く取り組んできた水産物の加工作業が原発事故などによりストップしたため、日中の活動がなくなったり、工賃を払えなくなる恐れがでてきていました。その事業所Aには「不安定になっている利用者へ、個別支援を念頭に置いて面談すること」、「工賃確保のための自主製品の販路拡大」、「今後の巡回と情報交換」を求められましたが、これらは地道で持続的な支援が必要になってきます。

■活動拠点の問題…現在の「センターいわて」の拠点は盛岡市内にあり、新幹線や高速道などの便は良いですが、内陸にあるため実際に活動する沿岸部までおよそ200キロ、車で片道2~3時間も移動時間がかかります。そのため新拠点を中継地点になる遠野市鱒沢に設置する準備をしており、物件も押さえて利用できる状態です。そこからならば沿岸中・南部まで60キロ程度になり効率的になりますが、まだ実際に使用するには事務手順や備品が未整備です。

■その他…

- ・現地での活動期間中の経費は、施設より負担して頂きました。
- ・交通網としては、新幹線ではおよそ5時間で、高速道路も問題なく走れます。また、ボランティア活動のために現地へ行く際には、静岡から盛岡までの高速料金が無料になる制度もあるようです。

東日本大震災 災害ボランティア活動 **感想文** (5月16日～20日)

浜松協働学舎 青葉の家

生活支援員 吉田時成

■活動の難しさ・課題…現地で活動しているうち、様々な困難や問題点が見えてきました。

①ニーズがでてこない。

被災者にお会いして困っていること・必要なものなどを尋ねても、「特に困っていることはない」という返事をよく聞きました。家を失い避難所生活なのになぜ、と思ったのですが、ニーズを挙げないにはいくつか理由が考えられます。

- ・土地柄で、特に沿岸地域の方達は忍耐強くがんこな気質
- ・少し会って話しただけのボランティアに、なかなか心を開けない
- ・「障がい」者を、そのような個性をもった人として、地域の一員と同様な理解をしている
- ・従来から福祉サービスが少なく、どうサービスを活用すればいいのかわからない
- ・行財政が弱く、ニーズを挙げても要求が通らない

など、震災以前からの地域の特性・問題点も多く含まれており、しっかりニーズを把握して支援につなげていくにはハード・ソフト両面から大きな働きかけが必要とされます。

②地域サービスにつなげづらい。

地元の事業所が被災して運営されなかったり、利用者・職員数の減少などから閉鎖されるところもでてきています。

③県内のボランティアは決して多くない。

県外ボランティアは多く集まっても、いずれ去っていきます。県内（内陸部）からも支援活動のために来てはいますが、あまり活発とはいえません。

④「福祉避難所」が機能できていない。

福祉避難所が基幹として地域の障がい者などを支援することが望まれますが、実際には10:1の人員配置さえ満たせば、あとは地域の方たちの受け入れを渋っているケースもあるそうです。

⑤障害者の動向を行政・地域で把握できていない。

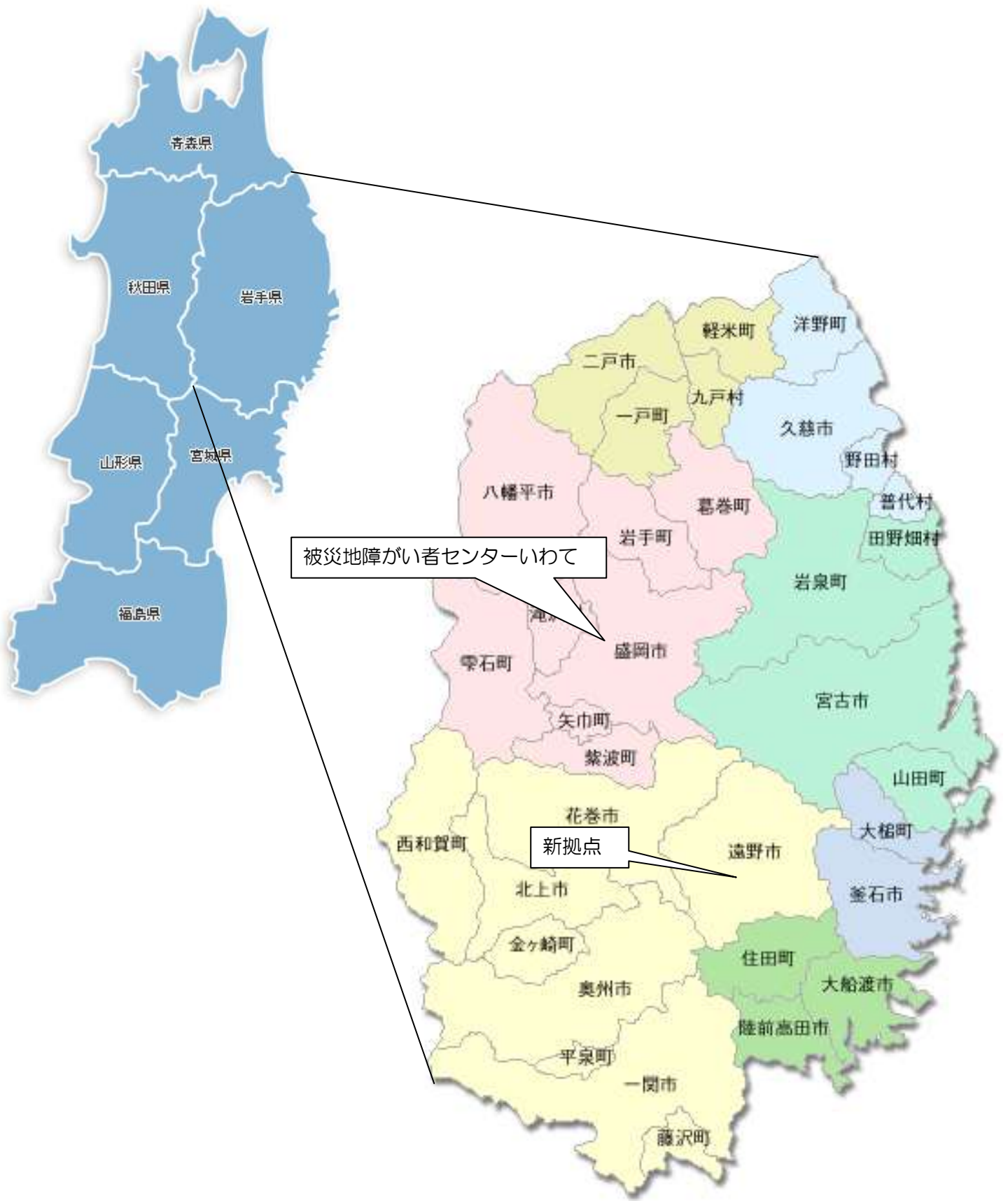
避難所にいられず車内生活や遠くの地へ移ってしまうケースが多くありましたが、なぜそのような状況になっているのか、実際にどれだけの数がどこにいるのかわからないまま「ここには障がい者はいません」と片付けられることもありました。しかし、地域と強く結びついて助け合っているケースもあります。日常からの防災訓練を地域と連携して行うことで、被害を抑えられていました。

⑥「センターいわて」自体の活動量が保障されない。

被災から時間が経つに従いボランティアの数は減ってきており、現地のサービスにつなげられなければ、これまでできていた支援が継続出来ずに中断する可能性も考えられます。

静岡から継続的に支援があることは、とても助けになっています。今後1人でも多く、できれば長期で、現地での活動を繋げていってほしいです。

以上、活動中に感じたことを列挙しました。今回の被災地派遣では、想像を絶する現実、それを受け容れなければならない現実を目の当たりにしてきました。復興には長い時間が必要ですが、私たち一人一人の力を繋げていくことが不可欠です。



被災地障がい者センターいわて

住 所：岩手県盛岡市本宮 1-3-20 光立ビル 1 階

TEL : 019-635-6226

ブログ：<http://20110311iwate.blog27.fc2.com/>